

続・ 珈琲の思い出三

とある日の朝のことだった。
いつものように寝ぼけまなこで朝刊を読んでいると、突然優子の笑顔が目飛び込んできた。

最近気がつくといつも彼女のことを考えているので、ついに幻覚が見え始めたのかと思ったら、新聞に大きく優子が掲載されていたのだ。途端に心臓はドキドキし、食べていた朝食のトーストが喉につまりそうになったので、慌てて紅茶で流しこんだ。カウンタークITCHENの中に立つ妻に気づかれないうちに、息をひそめて、記事を熟読した。

優子の例の絵本のおはなし会が好評らしくそれでインタビューされているようだった。それによると、優子は本名・鈴木優子、現在34歳。東京の大学で絵本や児童文学について学び、この町に帰郷、そのまま駅前の本屋に就職したらしい。しかも、次のくだりを読んで、僕は心臓が止まりそうになった。小学4年と1年生の娘が二人いるらしい。

おはなし会での子どもたちのあしらい方のうまさをかんがみても、子どもがいても全く不思議はないのだが、勝手に独身だとばかり思い込んでいた僕にとっては、まさに晴天の霹靂だった。

記事は優子の読み語りのうまさや、絵本に関する知識の豊富さを称えて、締めくくられていた。

僕は動悸を押さえながら、こっそりはさみで優子の記事を切り取り、スーツの胸ポケットにしるばせて会社に向かった。